

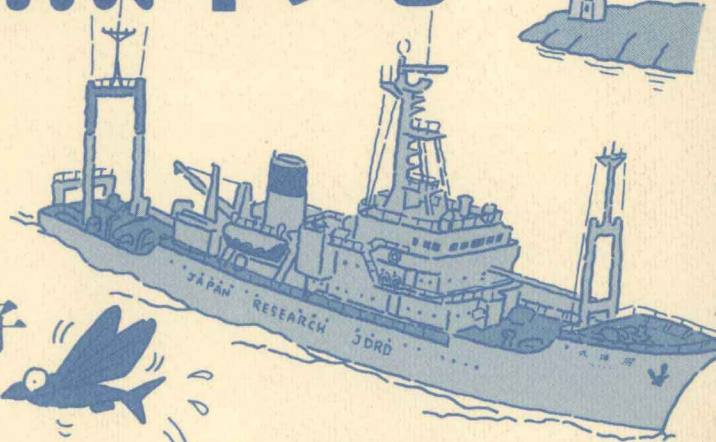
私のオフィスは

女性航海士の洋上日記

照洋丸



佐伯友子



三省堂

私のオフィスは

女性航海士の洋上日記

照洋丸

佐伯友子

三省堂

佐伯友子（さえきともこ）

昭和34年10月30日生まれ

52年 3月神奈川県立松陽高校卒業

4月神奈川県立岡津高校に理科担当助手として勤務

56年 4月水産大学校漁業学科入学

61年 3月 同漁業学科専攻科卒業

5月三級海技士（航海）取得

7月水産大学校練習船耕洋丸に

次席三等航海士として乗船

平成 2年 9月運輸省航海訓練所 練習船銀河丸 次席事務員佐伯克
仁と結婚

3年 7月水産庁船舶管理室勤務

12月一級海技士（航海）取得

4年 4月漁業調査船照洋丸に次席三等航海士として乗船

私のオフィスは照洋丸

一女性航海士の洋上日記

1994年10月30日 第1刷発行

著 者 佐伯友子

発行者 株式会社 三省堂

代表者 守屋眞明

発行所 株式会社 三省堂

〒101 東京都千代田区三崎町二丁目22番14号

電話 編集 (03)3230-9411

販売 (03)3230-9412

振替口座 00160-5-54300

©T.SAEKI 1994 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替えいたします（私のオフィスは照洋丸）

ISBN4-385-35614-9

[R]本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上
での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、
日本複写権センター（03 3269 5784）にご連絡ください。

私のオフィスは照洋丸◎女性航海士の洋上日記

目次

まえがき 7

第1章

照洋丸出港！

13

6月17日 船酔いの洗札式 14

照洋丸はこんな船 19

もうひとつの洗札式 夫との別れ 27

積み込み大作戦 32

ワンコとピリカ 43

第2章

私のオフィスは照洋丸

47

ブリッジに出勤 48

6月20日 海鳥捕獲大作戦 59



第

3

章

女性が航海士になるといひつゝ

85

7月1日 総動員の海鳥回収

.....

65

カナダ・ビクトリアにアプローチ(到着)

.....

72

神宮司さんからの手紙

.....

80

ブル好きの少女が最初に見た夢

.....

86

航海士という職業を選んで

.....

97

夫とのFAX交換日記1

.....

105

河童が陸にいる時——休日の照洋丸

.....

115

第

4

章

憧れのムーンボウとの遭遇

125

7月20日

操業1日目は魚運びに参加

.....

126



エンジン照洋丸ライフ

165

獲物はヨシキリザメばかり……………133

アカイカがいつぱい……………135

エチオピアに会い、海鳥に指を挟まれる……………142

初宣言は残念ながら空ぶり……………148

さとし君の話——遠洋漁業の行く末……………151

ホノルルのスーパードでワッチする……………154

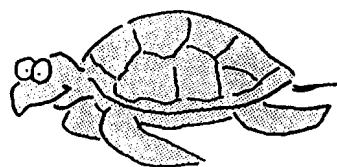
憧れのムーンボウ……………159

極楽太平洋温泉のあとの「消えたパンツ」事件……………166

看護師はフル回転……………172

「本日のビデオ」でタイタニック号沈没を見る……………177

船のごみ処理……………184



時化模様スケッチ 187

第
6
章

航海、無事終了

191

ただひたすらのアカイカ追跡調査 192

夫とのFAX交換日記2 203

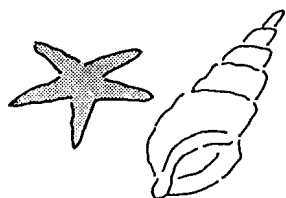
タコイカの酢イカ? 207

夫とのFAX交換日記3 212

難所・野島埼に行く 215

入港用意 総員配置につけ/ただいま 東京 222

カバー・本文イラスト ● 細馬一紀



まえがき

乗組員のほとんどが男性という船の社会にいて、女性であることのデメリットを感じることは少なくない。けれども、女性であり航海士であることが、普通なら通り過ぎてしまうような人たちの足を止めて、出会いの機会をもたしらしてくれることもしばしばあった。『女性の航海士』に興味を持った陸の人びとの中には、海や船について現実とかけ離れたイメージを抱いていたり、水産が自分から遠いところに存在しているように思っている人が多い。

テレビや雑誌には夢を乗せて走る豪華な客船が登場し、魚といえばスーパーマーケットにパックの切り身魚が豊富に並んでいる時代ならしかたないかもしれないが……。

実際自分のことを考えてみても、水産大学校に入学するまで、海は遊びに行くところ、船はお客で乗るもの、魚は買って食べるものにすぎなかった。水産庁そのものも、小学校の社会科で習う「水産行政を司る政府の一機関」という認識しかなかった。

水産庁に取締船、調査船、練習船という3種類の船が存在し、500人の船乗りが、50トンに満たない4人乗組みの船から、遠く南極まで調査に出かける3000トンのハイテク船まで20隻の船を動かし、漁業に関する調査、取締、訓練などのために働いているなんてことは、海に囲まれた魚食の国でありながら関係者やその家族くらいにしか知られていない。

取締船は日本の200海里だけでなく、日本漁船の操業する大西洋、インド洋等の遠洋海域まで出かけて行つて、漁業管理のために定められた漁場や漁期、漁法などが守られているかを監視し、違反船の取締業務を行う。2隻の練習船は日本の水産界に人材を送り出すため、水産大学校の学生を乗せ、漁業実習などの練習航海を続ける。

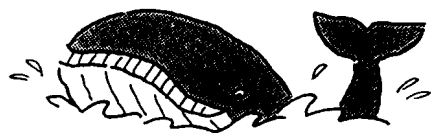
そして調査船は水産庁所属の水産研究所が研究している、日本周辺海域のあるいは日本漁業が対象としている沖合、遠洋海域の資源に対する調査のために海に出る。どの船もみんな日本の水産業を発展させ、水産資源を守りタンパク質などの栄養源を国民に供給するために働いている。魚離れといわれても、味噌汁のだしでさえ煮干しや鰹節などの水産加工品であることを考えると、水産物抜ききの食生活は、自分が年をとってステッキをばくついている姿と同じくらい想像しにくい。

近年では、欧米諸国を中心として地球環境問題に対する意識が高まり、それに対応して調査船の調査内容も多様化しつつあるという。水産庁調査船12隻のうち2番目に大きい照洋丸（総トン数1362・86トン）は1972（昭和47）年建造以来20年間に渡り、カツオ、マグロ、サンマなどの資源調査航海を行ってきたが、1992年夏、加工品や冷凍品として市場に出回ることの多いアカイカの調査のため86日間、北太平洋横断の航海を行った。アカイカを漁獲するための公海流し網漁業は、海鳥や海産哺乳類を混獲してしまうという理由で、1991年12月の国連総会決議によって1年後の操業停止が決定してしまった。

たった1年では漁業転換もままならず、多くの漁業者が減船を余儀なくされることになった。水産加工業者や消費者に与える影響も大きく、効率的かつ混獲をしないでアカイカを漁業する漁法の開発は必至であり、そのためにはアカイカと混獲される生物の生態を知らなければならない。

水産庁漁業調査船照洋丸のアカイカ調査航海は86日間に2つの寄港地をおいて3航海に分割され、東京からカナダ西岸のビクトリアまでは海鳥の追跡調査、ビクトリアからハワイのホノルルまでは流し網調査、ホノルルから母港東京まではアカイカの追跡調査が実施された。

私は水産大学の航海士として5年、その後9か月の陸上勤務を経て、照洋丸に乗船した。初めての調査船、初めての乗組員、初めて夫に見送られる航海。それは照洋丸にとっても女性の航海士を受け入れる初めての航海だった。長い間男の世界を守ってきた船、戦場イコール生活の場である船、そこに性別の違う人間が一人入り込んだのだ。



けれど私はごくありふれた「普通の人」で、頭がいいわけでも、特別の家庭に育ったのでも、男性並みの体格でもない。夫への理解の深さは人以上かもしれないが、愛する人と普通に結婚し、家に帰ればたまに主婦として料理をし、掃除をし、平日の休暇には昼間からテレビのワイドショーを見てごろごろしている。そんな普通の私が「かなわなくても」と夢を捨てずにいたら、いつのまにか「時代」とたくさんの人たちの応援という強いつれ潮にのって、ここに辿り着いた。

私は今、定年まで勤めても巡り来るかどうかわからない「世界周航」の途上でこの原稿を書き終えることとなった（メキシコ湾と地中海の黒マグロ卵稚仔調査を目的とした約6か月の航海）。その間に航海士9年目を迎えたが、不器用であわてもので、航海士には不適切な要素を備えた私が、特に意志が強いわけでもなかったのに、海しか逃げ場所のないという環境のおかげで、航海士を続けて来れたのだ。

9年といっても、私は海や船や魚が好きなだけの未熟な一航海士で、これまでに見たり聞いたり、経験したことなどは船や水産のほんの一部にすぎないが、読者の皆様には、本書とともに調査船照洋丸で楽しい航海をしていただければ幸いである。

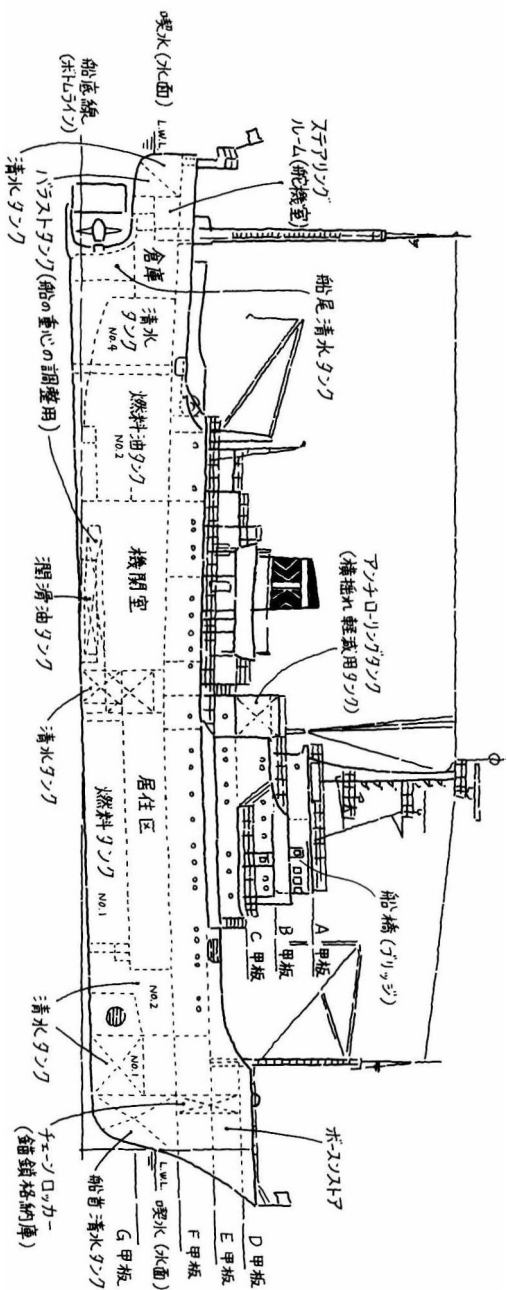
出港用意 総員配置につけ／

佐伯友子

1994年9月

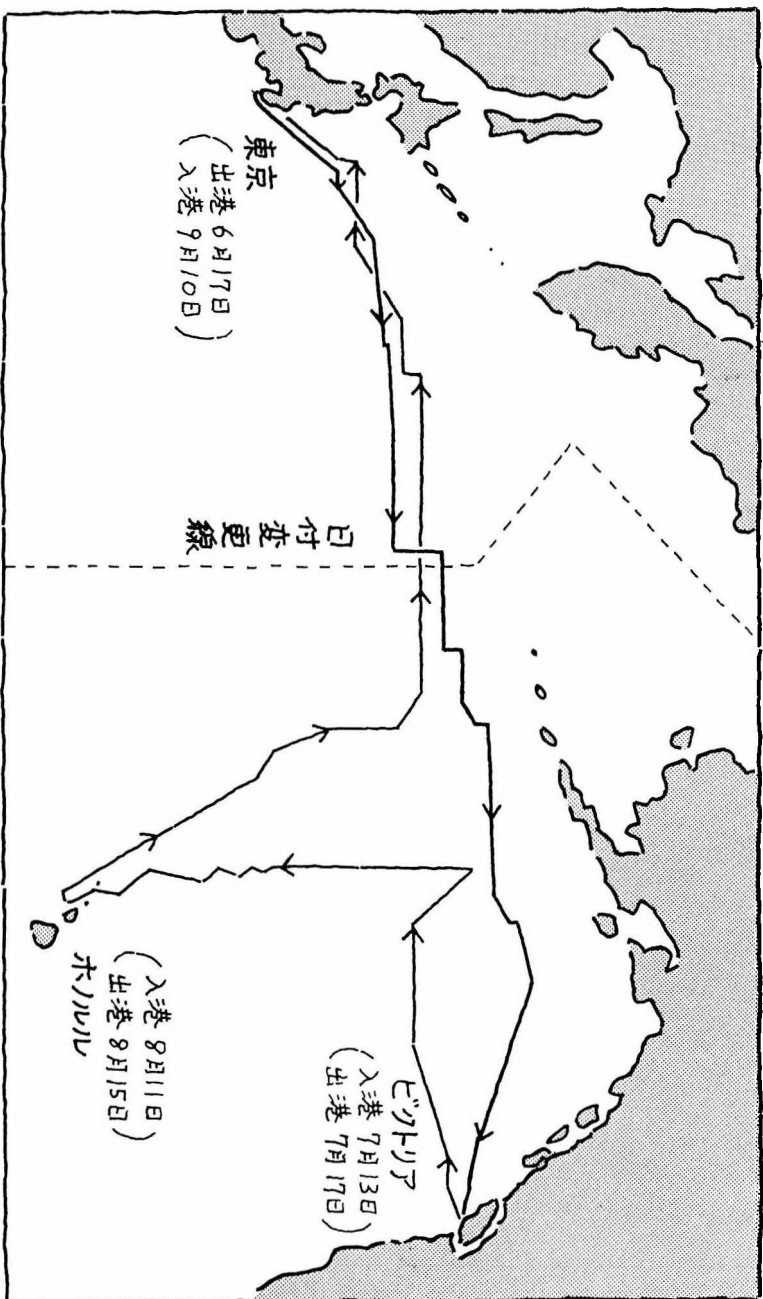


照洋丸一般配置図





照洋丸 航海調査航跡図

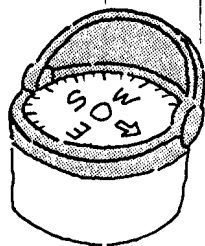
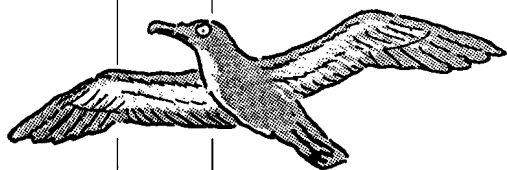


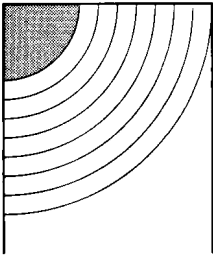
第

1

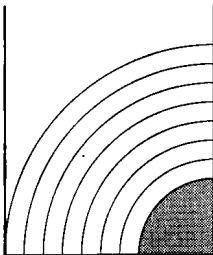
章

照洋丸出港！





6月17日 船酔いの洗礼式



2時間くらいウトウトして、気がついた時には船はもう東京湾を出ていた。けっこう揺れている。

ベッドから起き上がり床の上に立つと、足先から船酔いが染み込んでくるような気がした。船酔いのベテランとしては、症状にはかなり詳しい。まず頭が重くなってくる。次に首筋、肩にかけて凝ってくる。さらに脱力感がして生あくびが多くなり、寒気とのぼせが交互にやってきたかと思うと、睡魔が襲ってくる。重力の法則に従うように、症状はだんだん下へ降りて来て吐き気がし始め、やがて船酔い菌は胃の中で暴れ出す。もちろん、そんな菌は存在しないけれど、そんな気分だ。

初めて船に乗ったのにまったく酔わない人もまれにいて、羨ましく、そして、悔しい。しかし多かれ少なかれ、出港直後には熟練した船乗りでも、どれかの症状が出て絶対調ではない。私の場合は「特に弱い」タイプに分類される。学生時代の練習航海では食事の取れない日は何日も続き、私を含め5人の学生は、船長命令により点滴を打たれるはめにな